大会レポート
クラブカップ 7 人リレー
2004 年 10 月 3 日

多摩 ・カップを奪還！

木村佳司

雨の高原で多摩 OL が吼えた。大逆転の展開で多摩がクラブカップを 3 年ぶりに奪還した。

クラブカップ 7 人リレー2004
2004 年 10 月 3 日（日）
長野県駒ヶ根市家族旅行村

クラブカップ成績

1 多摩 OL-A　3:43:45
　藤平 正敏 菅原 琢 山崎貴彦 原響子 Joerg Vetter 多田宗弘 円井基史
2 Team 白樺 A　3:44:03
　柿並義宏 番場 洋子 田崎友康 元木友子 利光良平 元木 悟 小林 恭輔
3 渋谷で走る会 B　3:45:19
　浜端紀行 安良和寿 羽鳥和重 加賀屋寿理 志村直子 加賀屋博文 鹿島田浩二
4 朱雀 OK-B　3:45:34
　長谷川裕 土屋周史 樋口一志 浅井千穂 加納尚子 金谷敏行 西尾信寛
5 ES 関東クラブ B　3:46:10
　大久保裕介 広江淳良 小暮喜代志 山口季見子 渡辺円香 加藤弘之 山口大助
6 横浜 OL クラブ A　3:55:40
　山内亮太 青木博人 田所真之 石川裕理 志村聡子 山本英勝 紺野俊介

ベテランカップ成績

1 サン・スーシ C　2:22:31
　文正萬 杉山隆司 冨樫勉 尾上秀雄
2 三河 OL クラブ C　2:42:29
　内藤ヒロオ 河村健二 尾和薫 小幡昭次
3 春日部 OLC-A　3:00:14
　石沢賢二 森山松年 井上稔雄 中山勝

多摩 OL、雨の中を歓喜のウイニングラン

大逆転！

まったくリレーは何が起こるか判らない。「今年のクラブカップは Team 白樺の優勝でキマリ」。6 走中間で誰もがそう思った。

Team 白樺は序盤の混戦から常にレースを引っ張ってきた。女子カードの番場を 2 走で投入、4 走に元木友子を投入。これで他のチームを引き離し、さらにこれに続く男子ランナーもじわじわと他チームとの差を広げて行く。そして 6 走の元木悟の中間地点では 2 位を 8 分半引き離すダントツの首位を走っていた。

しかしここから多摩の追撃が始まった。元木を追う多摩の多田はコース後半の登り部分でじわりじわりとその差を 7 分半にまで縮める。

多摩のアンカー円井は白樺のアンカー小林を追撃する。7 分半をアンカー一人で逆転するのは容易ではない。しかしリレーは、オリエンテーリングは何が起こるか判らない。特に駒ヶ根のテレインは細かなミスが大きなタイムロスにつながる。

注目が集まる中、中間ビジブルに最初に姿を現したのは多摩の円井だった。

後半に入り白樺の小林はその差を縮め円井の背中を追いかけるが、わずかに及ばず 18 秒差で多摩 OL が歓喜のウイニングランを飾った。

その後も次々とランナーがフィニッシュし、終わってみれば 1 位から 5 位までの差がわずか 2 分 25 秒という大混戦だった。とても 4 時間弱のレースとは思えなかった。

多摩 OL 三冠を達成

このクラブカップ 7 人リレーは同じリレーコースを走るのだが、いろいろなカテゴリ別表彰も用意されている。

7 人ランナーの合計年齢が 300 歳以上となる Over300 カテゴリも多摩の C チームが 1 位となった。

またファームチャンピョンという 2 軍の成績 No.1 も多摩が獲得した。実際に多摩 OL は 3 走時点では A チームと B チームの成績が逆転しており、クラブの層の厚さを物語っている。最終的に多摩 B チームは 8 位だった。

逆に若者チームを対象とした Under150 カテゴリでは、今年も東北大学 MG 連合が No.1 になっている。総合でも 11 位の好成績だ。

ここで注目なのが、Under150 の No.2。

傘の花に囲まれて、怒涛の 1 走スタート

大学生チームかというとそうではない。OLC 東海こと東海中学・高校のメンバーたちなのだ。ひとりあたり 3 分半縮められると Under150 カテゴリの No.1 は高校生チームに奪われてしまうぞ。

ベテランカップは今年もサンスーシの優勝となった。昨年に引き続き、サンスーシの定番席となった感じのあるベテランカップ。他クラブも打倒・サンスーシの秘策を引っさげて激突するようになってもらいたいものだ。

昨年の優勝チーム ES 関東。今年は 5 位。
来年も 001 のナンバーを目指して。

1050 名の挑戦

今年のクラブカップは駒ヶ根高原というロケーションということもあり、久々に 1000 名の大台を回復した。東西の公認大会やインカレでももはや 1000 名を集めるのが難しい時代に、これだけの人数を集まるクラブカップ。その魅力はなんだろう。

それは、主宰者山川が参加者の目線に立った大会を目指す姿である。クラブカップが参加対象としているのは全てのオリエンテーリング愛好家である。そこにはオリエンテーリングクラブを支える色々なキャラクターがそれぞれ主役になれる仕組みがある。

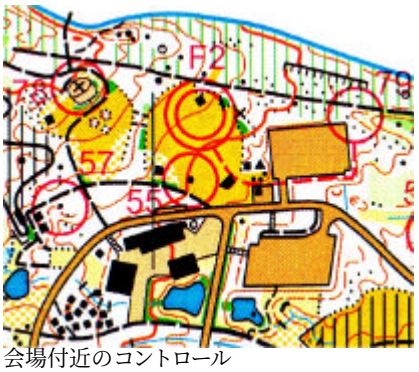
まずは 7 人でリレーをつなぐロマン。そして男女ミックスを基本としたチームワーク。そして各走順で異なる資質を要求するコースセッティングである。

こんな中で、トップを目指すのか、入賞を目指すのか、完走を目指すのか。それともライバルチームとの勝負に臨むのか。

この大会を支える地図は正確に調査されたもの。これは初心者だろうが、上級者だろうが求めるところだ。この地図作成で手を抜かないことがクラブカップをここまで支持されたひとつの要因である。そしてテレインも毎回出来る限りリレーに適したテレインを選んでいる。

とにかくあらゆる層の参加者が全力で挑むだけの課題がクラブカップでは与えられる。

クラブカップはその参加者の対象をクラブ員の家族にまで広げている。会場周辺に簡単なコースを設定し、レースには参加できない子供にも、キッズ 0 を提供している。コースを全て回ってシールを集めると、おやつが貰える。今回は雨のため参加者が少なかったのが残念だ。ちなみに今回のキッズ 0 は受付・運営しているのも小学生だった。こうした社会参加している小学生は実に生き生きと運営を楽しんでいる。



会場付近のコントロール
コース中盤で地図の右側から会場内の 55 番に全てのランナーが現れる。その後 57 番をパンチしてまた森の中へ。森から出てきたランナーは第二ビジブル 78 番を通過後、会場横の声援を浴びて最終 79 番へ。
このようにランナーが何度もチームメイトの応援を受けるようにコース設計されている。

隣接に泣いた

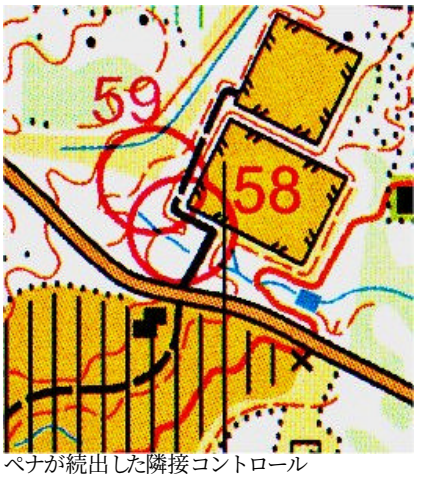
今回のクラブカップの特徴としては、隣接コントロールを誤って通過して、失格になってしまったチームが多かったことである。

多くの参加者に楽しんで貰いたいというクラブカップの目指す姿とは違った結果になって少し残念だ。

問題の隣接コントロールは、会場付近にあった。会場内部に置かれた第一ビジブルコントロール(55 番)。このひとつ手前に設置された二つのコントロールが今回の悲劇を生んだ。

(58 番)と(59 番)は僅か 30m 程度しか離れていない。一応違う特徴物に置かれていたこの 2 つのコントロールだが、手前のコントロールを間違ってパンチしてしまう選手が続出した。

前半のテクニカルレッグが終わり、会場ビジブル区間に向かって緩やかに登る途中にあるコントロール。会場の声援が間近に聞こえる。精神的にもあせる気持ちがあるのだろう。コントロール番号を確認するのはランナーの義務でもあるが、ミスパンチを誘発するようなコース設定であったことは否めない。



ペナが続出した隣接コントロール
ランナーは右下の道路からアプローチしてくる。先に 58 番が目に飛び込んで、これをパンチした者が多かった。

来年は世界選手権とともに

来年のクラブカップは 8 月 13 日(土)に三河高原で開催される。前日は世界選手権ロング決勝、翌日は世界選手権リレーが組まれている。世界選手権併設大会参加とともにクラブカップに参加といきたいものだ。

さらにその次となる 2006 年のクラブカップの開催地は未定らしいが、今回の駒ヶ根高原の地元から再度開催のオファーがあるという。

今後もクラブカップは多いにオリエンティアを楽しませてくれるに違いない。

（木村佳司）